第 309 回研究報告会（3月8日）
日本統治下パラオにおける天理教の布教活動

山西弘朗

今回の研究報告では、次の二点に焦点を当てて発表を行った。第一点は、日本統治下のパラオにおける天理教の布教活動について、第二点は天理教の海外伝道論についてである。

前者は主に教内の文献資料に基づいて報告を行い、パラオ布教に従事した布教師の来歴や布教方法、活動展開を明らかにした。また同時期に布教活動を行っていたキリスト教や仏教との比較をとおして、天理教による布教活動の特徴を指摘した。

パラオにおける布教活動は日本が国際連盟の委任統治を行なったことが契機であるが、布教対象はあくまでも日本内地からの移住した多数者ではなく、言語も文化も異なる現地の人々であった。そこには、支配者と被支配者という単なる二項対立の構図では把握できない、同じ親神の子供、つまり一列兄弟というまなざしがあった。

このような布教師たちが直面した最大の問題は、経済基盤の不安定さであった。それを解決するために、開発事業への投資や、妻による助産師や家政婦の出稼ぎなどを行ったが、必ずしも成功しなかった。この点は、パラオにおける布教経験から学ぶべき反省点であろう。

さて、後者は天理教の海外伝道論の在り方を模索するものである。たとえば「おさしづ」に「どんな処へにをい掛かるも、皆入り込んでの自由と聞かし置こう。」(明治 25 年 12 月 17 日)とあるように、布教はあくまでも神のはたらきによるものという側面と、同時に２代真柱の「海外伝道を考えうるに際しては伝道者を養成すること、企画指導監督すること、後方より支持助力することが考えられた。これが語学校となり、海外伝道部となり、そして研究機関となった。従って研究所も唯単なる研究機関ではなく、海外伝道に関する後方の参謀機関の役割が要望される」との言葉にあるように計画や構想に基づいて行われるべきものでもあるという側面、この両者のバランスをいかに保ちながら海外伝道を推進していくかを、先人たちの残した海外布教の経験から真剣に検討するべきであるということを指摘して報告を締め括った。

第 310 回研究報告会（3月 30 日）
道にたとえられる宗教―古代イスラエルにおける「歴史」記述を中心にして―

岩嵜大悟

本発表は、2018 年 1 月に天理教青年会本部で行われた天理セミナリウムでの発表を、質疑とコメントを受けて、さらに発展させたものである。

宗教を「道」にたとえることは、古代より世界中の諸宗教に広く見られる。本発表では、旧約聖書に記されている古代イスラエルの「歴史」記述から宗教を「道」にたとえられている箇所のうち、主要なものを検討した。発表では、まず前提となる古代イスラエルに関する知見などを確認した。次に、旧約聖書で使用されている「道」に関する語彙を確認した。聖書では 11 個の「道」に関する語があり、本発表では中でもデレクという語に注目し、その語が使用されている「歴史」記述での使用例を検討した。

その結果、王国以前の「歴史」記述である出エジプト記から士師記において「道」は民によるヤハウェ宗教と他の神々との関係に関する宗教的な振舞いを意味するものであった。しかし、王国成立後のサムエル記・列王記の記述では、王の宗教的な振舞いについて使用されており、民の宗教的な振舞いについては関心が希薄である。また、申命記での「道」は、①ヤハウェ宗教に関するもの、②他の神々とのかかわりに関するもの、③土地の約束と大国との関係に関するものに大きく分けることができ、ヨシュア記から列王記に至る一連の古代イスラエルの「歴史」の判断基準（の一つ）となっていた。このように、「道」として語られる宗教は、古代イスラエルの「歴史」記述において大きな役割を果たしている。

天理大学おやさと研究所

平成 30 年度公開教学講座

信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（4）

場所：天理教道友社６階ホール

時間：午前 10 時～ 11 時 30 分

事前予約不要・来聴無料

4 月 25 日(水)　高見宇造
56「ゆうべは御苦労やった」

5 月 25 日(金)　岡田正彦
61「廊下の下を」

6 月 25 日(月)　佐藤孝則
64「やんわり伸ばしたら」

9 月 25 日(火)　森　洋明
62「これより東」

10 月 25 日(木)　澤井治郎
59「まつり」

11 月 25 日(日)　堀内みどり
52「琴を習いや」